

来年は江戸開府 400 年。確かに江戸は遠くなりました。しかし、ものづくりの技術が飛躍的に発達した江戸時代には、豊かな消費を支える商業・流通が開花し、わが国独自の売る技術そして広告術が成立したのです。吉田秀雄記念事業財団では、江戸時代から今日まで、約6万点におよぶ広告資料を所蔵しています。このADMT・COLLECTIONでは、当財団の所蔵品の中から珍しいもの興味深いものを時代を追って選び出し、シリーズでご紹介します。

時代の鏡である広告。そこには人々の暮らしぶり、大きく飛躍する市場経済、そしてそれを支える卓抜した広告アイデアと表現技術が渾然と映し出されています。

看板と店頭広告

広告の起源とは何か。これにはいろいろな説があります。一説には数千年の昔に遡るといふ見方もありますが、もっと身近なところにも面白い広告の歴史が沢山あります。

そこで今回は看板を取り上げてみました。看板は単なる“標識”としての意味以上に、最も原初的な広告媒体の一つであり、今も昔も人々にとって馴染み深い広告であることは変わりません。では、わが国の看板はどんな変遷を辿ってきたのでしょうか。今回は、所蔵品の中から、江戸、明治、大正、昭和初期の選りすぐりの看板と店頭広告をご紹介します。

キャプションの内容
 ●資料名 (タイトル、商品名、商店・会社名、作品名)
 ●制作年代 (制作年のわかるものは元号、それ以外は使用された年代を表記)
 ●資料種類 (素材をふくむ)
 ●サイズ (cm)
 ●資料番号 (財団所蔵資料の登録番号)



① 筆型看板
江戸期 木製看板
40.5 × 10.5 × 10.5
1988-1293



② 精應丹 好蘭堂
江戸末期頃 木製看板
104 × 46 × 4.2
1986-1164



③ 両替
江戸末期 木製看板
48.3 × 37 × 2.1
1986-278



④ 勾玉型 奇麟膏
江戸末期頃 木製看板
97 × 48 × 3.2
1986-1480



⑤ 花柳丸
江戸末期頃 木製看板
142.7 × 45.5 × 4.8
1986-406

⑥ まる八足袋
江戸末期頃 木製看板
93.5 × 29.7 × 3.5
1988-1304

⑦ 鯉節
江戸末期頃 木製看板
150.5 × 91 × 3.8
1986-880



⑧ ろうそく型看板
江戸期 貼りぼて看板
115 × 60 × 60
1988-27



江戸の看板と屋外広告の役割

今日のように多種多様な広告媒体が存在しなかった江戸時代には、看板や暖簾などの屋外広告・店頭広告は非常に重要な広告媒体でした。特に看板はその店の存在を知らせ、特徴や好ましいイメージを伝える役割を果たしていました。その人目を引くデザインや豪華な造りからは、それぞれの店の創意工夫が伝わってきます。例えば、今回掲載した「ろうそく屋」や「筆屋」などの商品そのものを模った看板を見れば、商いの内容や商品は一目瞭然です。

また「長寿金龍丹」「花柳丸」などは、金塗りを駆使した威厳のあるつくりで、当時の薬屋、薬種商の強大さを感じさせます。

このように、店頭のアイデンティティを強調することが江戸時代の広告手法の基本であり、“看板は商の顔”だったのです。錦絵の風景に見られる大きな屋号や大掛かりな看板は、現在のCIやブランド広告の原点といえるかもしれません。



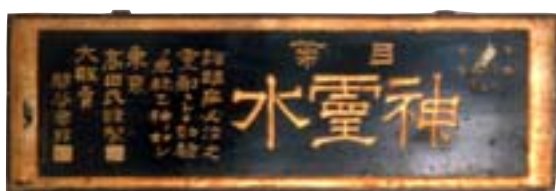
① 長寿金龍丹 永松軒
江戸期頃 木製看板
121.7×57.8×6.8
1988-1307



② 宝丹 守田治兵衛
明治期頃 木製看板
60.2×151.7×5.2
1989-1



③ 健胃散 ドクヌキ丸
明治期頃 木製看板
45×115×3.2
1986-1166



④ 目薬 神霊水
明治期頃 木製看板
105×33×3.6
1986-1155



⑤ 富士屋
保阪時計本舗
明治期頃
木製看板
一部ガラス
69×78.5×4.3
1988-1309



⑥ 猫イラズ 坪井薬店
明治末期頃 木製看板
51.5×41×41
1986-1958



⑦ 床屋ねじり紅白
明治末期
ガラス看板
70×16×16
1986-2303



⑤ 仁丹
明治末期
木製看板
105 × 65 × 0.4
1994-983

明治・大正・昭和初期の看板

この時代の看板の変化を辿るには、まずその素材に注目すべきでしょう。江戸時代には一部、紙を貼り重ねた張子のようなものもありましたが、その多くは主に木製でした。

明治になると、素材にガラスが使用されたり、使われる文字もカタカナやローマ字になるなど、文明開化の香りが豊かに感じられます。デザインは洗練され、今日も目にすることができるキャラクターたちもその姿を見せ始めます。

さらに、大正時代・昭和初期に入ると、屋外でも耐用性のあるホーロー素材が登場してきます。



④ 健通丸
明治末期 掛看板
45.1 × 91 × 3.8
1986-498



① 六神丸 日月丸
明治末期
木製看板 一部ガラス(鏡)
88.5 × 58.8 × 5.7
1997-803



① 金物石炭 天野屋
明治末期 油絵看板
154 × 93
1995-807



③ 天狗煙草 岩谷商会
明治中期
ガラス看板
67 × 46.7 × 2.9
1988-1294



② 筆墨屋
明治期頃
木製看板
125 × 44 × 3.3
1986-408

① 藤澤樟脳
昭和初期頃 ホーロー看板
48 × 30.3
1986-1153



看板研究のおすすめ

看板に関する研究者やコレクターは多い。代表的な研究の手引き書としては、江戸末期頃、30年間に渡り調査・執筆した喜田川守貞著『守貞謾稿（もりさだまんこう）』です。また、『工商技芸看板考』（坪井正五郎著・明治20年刊）では「御客は蜂、売り物は蜜、看板は花卉」と看板の役割を説いています。当時の商人たちは“花びら”を目立たせ、客をひきつけることに、創意と美芸を競っていたのです。

江戸・明治期の看板コレクションに大森貝塚の発見者と

しても有名なエドワード・モースの蒐集したものがあります。東京大学の教授として来日中（1877年～1882年）に日本人の生活を丹念に記録し、陶器や民具、工芸品、看板などを持ち帰りました。それは現在、米国マサチューセッツ州セイラム市のピーボディー博物館に収蔵されています。

「商いの顔」としての看板は江戸の商業・文化と共に進化発展しながらも、今日なお魅力ある広告媒体なのです。

以下に当財団所蔵の参考資料・文献の一部を紹介します。



「信州東山堂本家
建看板の図」
引札（部分）
嘉永4年
34.2×44cm
1987-3577

薬種商の店頭に置かれた特大の建て看板。三丈八尺余（11.5m）の高さを誇った。道行く人々を驚かせ、また薬の効能と店の威厳をも表現していたに違いない。

「女房気質異赤繩
（ようぼうかたぎおつなえにし）」
和本 式亭三馬作 文化11年 1999-122

自作の戯作本の中に賑わっている自分の店の店頭風景を描かせて宣伝した。当時の人気化粧水「江戸の水」や「金勢丸」の看板がある。



「大まるや店頭」
錦絵（部分） 香蝶楼国貞画
江戸期文政頃
2000-330

大丸呉服店大暖簾の前の美人画錦絵。当時の人気芸者のプロマイドに便乗したブランド広告か。版元とのタイアップとも考えられる。



「古今看板図誌」 本山桂川著 手書き彩色和綴じ本
東亜民俗研究所刊（1944年刊） 1993-1393

著者は南方熊楠、柳田國男らと同時代の民俗学者。明治から残存している看板が消滅していくのを惜しんで、自ら取材・収集した看板の直筆手彩色の限定本。図版50点収録。



《参考図書》

- 「工商技芸看板考」坪井正五郎著 哲学書院（1887年刊）
 - 「江戸の看板」松宮三郎著 東京看板工業協同組合（1959年刊）
 - 「江戸看板図譜」林美一著 三樹書房（1977年刊）
 - 「江戸店舗図譜」林美一著 三樹書房（1978年刊）
 - 「日本屋外広告史」谷峰蔵著 岩崎美術社（1989年刊）
 - 「守貞謾稿図版集成」高橋雅夫編著 雄山閣出版（2002年刊）
- （『守貞謾稿』は他に東京堂出版、岩波文庫からも翻刻版など多数既刊）
*その他多数の研究書、解説書もありますが、紙面の都合上省略します。